

令和 4 年度天皇杯受賞者受賞理由概要  
農産・蚕糸部門

大規模ブロックローテーションによる経営発展と営農再開の取組

○氏名又は名称 有限会社 高ライスセンター（代表 佐々木 教喜）

○所在地 福島県南相馬市

○出品財 経営（水稲・小麦・大豆）

○受賞理由

・地域の概要

南相馬市は、福島県浜通りの北部で太平洋に面する平地農村地帯である。西部は比較的温暖であるが、オホーツク海高気圧から噴き出す冷たく湿った北東寄りの風（やませ）により、農作物の生育に影響を受けることもある。日照時間が長く、積雪が少ないため、水稲を始めとした作物生産に適した条件を有する。

・受賞者の取組の経過と経営の現況

平成 14 年の設立以降、水稲、小麦、大豆の 2 年 3 作のブロックローテーションと 6 次産業化に取り組み、現在は合計 228ha の作付を行っている。東日本大震災直後は近隣農地延べ 500ha の草刈りを受託し、維持管理と従業員の給与確保に努めた。乾田直播栽培やスマート農機の活用により、作業の分散と効率化を図っている。

・受賞者の特色

(1) ブロックローテーションと乾田直播栽培

2 年 3 作のブロックローテーションと不耕起 V 溝乾田直播栽培を組み合わせることで、春作業のピーク分散や収量の安定確保が図られている。作業平準化により、従業員の通年雇用やゴールデンウィーク等の長期休暇確保を可能としている。連作障害や雑草の抑制にも効果を発揮しており、他の農業者にとって模範となる取組である。

(2) スマート農業の活用

ドローンや収量コンバイン、自動操舵システムなど、スマート農業技術を積極的に導入し作業効率化を図っている。ほ場数は 500 筆に上るため、ほ場管理システムの活用により、作業日報や年間作付計画、栽培履歴等を一元管理している。

(3) 6 次産業化の取組

設立当時から加工販売に取り組む乾麺うどんは地域を代表する 6 次産業化商品である。東日本大震災直後、風評被害により売上げが落ちたが、試食会の実施など販売回復に努めてきた。現在は生産した小麦の約 15%を乾麺に加工している。

・普及性と今後の発展方向

高地区と近隣 3 地区の農地の大部分を作付する地域にとって極めて重要な担い手であり、他の農業法人の規模拡大の模範となっている。自社の強みであるブロックローテーションの効率化を突き詰めることで、更なる規模拡大を志向している。